

一次の文章は、大学の教員である筆者が、学生たち（ゼミ生）といっしょに、インドのラダック地方を訪ねた時のことを書いたものです。

これを読んで、後の問いに答えなさい。

木々は色づき、ラダックの秋は深まった。長くキビしい冬に備えて、人々は農作業に励んでいる。とはいえ、急いだり、忙しがつたり、あせつたり、イライラしたりする人は誰もいない。みな終始リラックスして、愉しげなのだ。歌を歌いながら家畜たちに輪の周りをグルグルと巻かせて大麦や豆を脱穀する。やがて、太陽が十分高くなって、高原にそよ風がやってくる時刻を待つて、ワラや草を飛ばして人間の食べものと動物の食べものをえり分ける風選が始まる。風を呼ぶための口笛をならし、歌を口ずさみながら、リズムカルに熊手を上下させる。しよつちゆう休むように見えるのは、やんだ風がまた吹き始めるのを待っているのだという。飛ばされたワラや草が金色に光る大きな山になると、それを大きな袋につめては倉庫に運ぶ。これが家畜たちの冬の食糧だ。たまに輪になって座つては、お茶を飲んだり、お菓子を食べたり、ドブクロを飲んだり。

ぼくにとつてのうれしい驚きは、もちろんこんな仕事は生まれて初めてのゼミ生たちが、見る間に農民に変身し、現地の人々と見まがうばかりの所作で悠々と仕事をこなすことだ。その姿は周囲の景色に溶け込んでいくように見えた。彼ら自身、何かすてきなことが自分の身に起こっていると感ぜたらしい。「アリエネー」を連発し、ところかまわず叫んだり、笑い出したり、歌い出したりするのだ。

しかし、平穏な谷間の村にも、変化の波が着実に押し寄せていることは否定しようもない。シャラーへは去年の同じ時期にも来ているが、そのときにはなかった大きな脱穀機械が出現したのだ。フランスのNGOの援助でそれを導入するために尽力したドルジエによれば、これまで十五日間かかった作業を半日で済ませることができるとのことだ。そのドルジエの家にホームステイして、機械による脱穀を手伝ったぼくの学生たちは、動揺を隠せなかった。

まず谷間の静寂をヤブるエンジン音。あたりにたちこめる排気ガスと埃。順番を待つてイライラする人たち。そして怯えているように見える家畜たち。ひとりの学生がぼくに言った言葉が忘れられない。

「先生、歌がないんです、歌が。」

レーに住む仏教思想家のタシ・ラブギヤスさんがこう言ったことがあるという。家畜とちがつて機械は死んでいるので、機械と働いていると、自分が機械のようになり、自分自身も死んだようになる、と。時間を節約するための機械やそれを動かす石油を買うために、より一層お金を稼ぐことが必要になる。現に、ドルジエはケイサツカンとしてカシミールに暮らし、ツオモの夫は軍隊にいる。まだオサナい子どもたちが親元を離れて都会の学校に通っているのだって、将来よい現金収入を得られるようにという思いからだろう。時間を節約するために、人々はそんなに多くの時間をつぎ込み、家族とさえ離れ離れにならなければならないのだ。

テレビにも困った。あんなに仲良く一日をともに過ごしたツオモの子どもたちが、家へ帰つてくると、食堂のテレビにかじりついて、遠い異国からの客人であるぼくたちの存在すら忘れてしまうようなのだ。しかし母親のツオモも祖父母も、そのことを気にかけるという風でもない。テレビを買うにあたって、「買わないで置く」という選択肢はない、と感ぜられたのと同じように、テレビが「X」以上、「Y」という選択肢はない、と大人も子どももみな感ぜているようなのだ。

ラマユルのゴンパを見学し、町の食堂で昼食をすませてから、ぼくたちは歩き始めた。十九名の学生のうち、体調のせいでこのトレッキングに参加できない者が数名出るだろうというぼくの予想は、すでに見事に外れていた。前半は急な山道をひたすら登る。富士山頂を超える高さだから、楽であるはずはない。ぼくの周囲からも、さらに後ろの方からも、あれやこれやの泣き言や悲鳴が聞こえてくるし、ぼく自身の膝も不平をもらし始める。しかし、案ずるより産むがやすし。なんとかひとり残らず無事峠に立つことができた。ガンゼンに突然現れた、切り立つ岩山と雲と光とが織りなす異世界の美しさにしばし言葉を失う。さつきまでの学生たちの泣きげも、もう晴れやかな笑顔に変わっている。日はすでに大きく西に傾いていた。日没前にリンラという集落にたどり着かなければならない。ガイドのスカルマとキョウリョクして、はしゃぐ学生たちを落ち着かせると、今度は一路急な坂を下る。学生たちの歌声が絶えない。

ついに視界が開けてポプラや杏の木々の生い茂る谷間が現れた。赤褐色の岩と砂礫ばかりの荒涼とした風景に慣れた目に、その柔らかな緑色は砂漠のオアシスのように胸をうつ。思えば、このコントラストにこそ、ラダックという地方が人々の心を惹きつけてやまない主な理由がある。それは千年かけて人と自然との間に築かれた一種の信頼関係を象徴している。ヒマラヤの氷河の溶け水である川や湧水を巧みに利用して、森と沃野をつくり、雨のほとんどない短い夏の間の農耕と、牧畜とを組み合わせて、質素だが安定した生活スタイルを築き、チベット仏教を中心とする豊かな精神文化をソウゾウし、そしてそのすべてを今に引き継いできた人々がかもし出す明るい笑顔と限りない優しさ。それは、人間の定住が必ずや周囲の生態系の劣化をもたらすというぼくたちの悲しい「常識」を見事に覆してくれる。また、苛酷な自然環境の中に住むマズしく幸うすい人々というステレオタイプをあつさりとはきき切つてみせる。それは、ヘレナ・ノーバーグリーホツジが「懐かしい未来」と呼んだ、古代から未来へと続くはずの架け橋だ。

(辻信一『ナマケモノ教授のぶらぶら人類学』による)

*注 NGO——政府によらない国際協力組織。

ゴンパ——僧院。

ステレオタイプ——固定した考え方。

問一 —— 線部 A ～ I のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 —— 線部 I 「その姿は周囲の景色に溶け込んでいくように見えた」とありますが、それはなぜですか。理由を答えなさい。

問三 —— 線部 2 「歌がないんです、歌が」とありますが、これはラダツクの人たちにどのような変化があつたことを表していますか。次の A ・ B に入れるのに適当な言葉を、問題文中からそれぞれ五字以内でぬき出しなさい。

以前は A していたが、今は B している。

問四 —— 線部 3 「人々はそんなにも多くの時間をつぎ込み」とありますが、本来どのように使うべき時間を、現実にはどのように使つてしまつているのですか、答えなさい。

問五 X ・ Y に入れるのに適当な言葉を、それぞれ考えて答えなさい。

問六 —— 線部 4 のことわざ「案ずるより産むがやすし」は、ここではどのようなことを指して言っていますか。具体的に答えなさい。

問七 —— 線部 5 「一種の信頼関係」とはどのような関係ですか、答えなさい。

二 次 の 文 章 は、画 家 で あ る 安 野 光 雅 が 二 〇 〇 〇 年 に 出 版 し た 『 故 郷 へ 帰 る 道 』 の 一 節 で す。こ れ を 読 ん で、後 の 問 に 答 え な さ い。

およそ三十年ばかり前のこと、日暮里に冠商店という荒物屋があつた。探しに行つてみたく思うが道はつきりしない。今もあればいいなと思う。なにしろあのあたりを走つていて、工事中のため道を曲るよう^①に誘導されてふと出会つた店である。

裏道のやや入り組んだ道の奥にあたり、店の裏は石を組んだ崖で、ひっそりした風情のある一角だつた。まず冠商店という大看板があるほか、店の表はたくさんの看板で埋まつていたが、それらはすべて手作り^②で、たとえば「鋸目立」と書いた看板は黄色の地に青の縁どり、画面に大きく黒い鋸があり、それについている刃は見事に白^③い。絵だけではなく、字も絵もたくましくしてたいへん好感のもてる筆使いなのである。何とも懐かしい絵だなど思つて考えると、これは、こどものころ遊んだ「いろはかるた」の絵札のような表現なのである。つまり「いろはかるた」をすごく大きく拡大して看板にしたと思えばいい。

「軍手」と書いた絵札もある、この字が良くて、やはり絵が描いてある。ほかに「雨傘」「地下足袋」「釘」などがあり、いまずぐには思いだせないが、ともかく屋根から軒下まで看板で埋まつていた。

あまりおもしろいので、写真に撮りたい、でも無断では悪かろうと思つて、店の中にはいり、ご主人にわけを話して許しを請うと、二つ返事で「いいですとも。」といつてくれた。

店の中は商品でいっぱいだった。花火もあればベゴマもある。チョークから箒、蚊取り線香、荷作り紐など、およそ荒物、日用雑貨で無いものはない。このあたりに住む人にとってとても便利な小百貨店だつたと思われる。ご主人はそのころ六十二、三といつたところで、ごましおのあたまを五分刈りにした実直そうな方だつた。許しを得たものだから、食欲に看板の一枚一枚をたんねんに撮つた。

写真を撮っていると、ご主人が改めて「あなたは絵描きさんではないですか。」といわれた。「まあ、その。」と答え、「これらの看板はわたしの大好きなタイプの仕事なのです。だからほかの人にも見せたいと思ひまして。」といつたところ、「わたしの仕事を認めてくれたのは、あなたが二人目だ。一人目はアメリカ人で、二十年ばかり前のこと、店先にロボットを作つて飾つて置いたところ、ジープで通りかかつた進駐軍の将校が降りてきて、ロボットをためつすがめつ見たあと、なにやら言われた。このロボットをぜひ譲つてくれと言つていることがやつとわかつた。気に入つてくれたことがうれしくて、ただで差し上げたいと言つたのだが、それはできないと(わたしはその金額は忘れたが)、ともかくたくさんのお金を置き、ロボットはジープに乗つてもらわれていつた。」

「二人目はあなたです。わたしはこどものころからずっと絵が好きで、暇さえあればものを作つたり、絵を描いたりして時間を過ごした。」だれかに習つたりしたのが、と聞けば、全く我流で先生はいないと言つた。東京芸大なら、歩いて行ける距離で、今にして思えば有元利夫(わたしの尊敬する画家、若くしてなくなった)の家もすぐ近くのはずである。この方は誰にも知られず、およそ五十年間一人で絵を描いてきたという計算になる。絵が好き人は多いが、この人のように純粋に自分の絵を育てた人は少ないと思つた。

「我流がいい、我流だからこそあなたの作品がわたしたちの目に、とても新鮮に映るのです。」とわたしは言つた。実を言つるとそれは自分^④にいきかせる言葉だつた。

ご主人に、描いた絵があるが見てくれないかと、家の縁側に招かれ、小さい衝立に仕立てた絵を見せてもらった。画面の上の方に（本当は建物の中に入っていて見えないところの）観音様が寝ておられ、両側に上り下りの石段があり、右はのぼる人、左は下る人の波でにぎわっている。題して、さる正月の「なにに観音参詣の記念」ということだった。参詣する人物の目鼻までいねいに描かれていたが、その人相はじつに善男善女であった。

もう一枚、トタン板に描かれた油絵があった。これは一面に緑の稲田で、速くに白い煙をはきながらS字が走っている。

「これは、日暮里あたりの風景で、汽車は常磐線、昔はこうだったが、今は昔の面影はない。だから明治百年を記念して描いたのです。」ということだった。

絵は、師匠が無かつたというだけあって、五十年以上も描きつづけているのに筆づかいが器用になつていない。これは、いい意味である。絵描きは、とかく初心を失い、技術的に熟練して筆が走るようになる。その筆さばきは一見上手に見えるが、それは心の問題ではなく手先だけの問題で、本当はいいことではない。画家に「明治百年を記念して」緑の田園を描いた人があるだろうか。

手先ではない、誠意である。こどもの絵がそうだが、大人になると大事なそれを恐れる。

*清水達雄（数学者）にこのことを話したら、「その常磐線の絵を買うことはできないか。あんたが仕入れてきた金額の二倍で買う。百万円だったら、二百万円で買う。清水組に買わせて社長室にかける。」といいはじめた。わたしは、買いに行った。金もうけをしようと思ったわけではない。ご主人は絵が売れば喜ばれるかもしれないし、小説のような話から事実をつかみ出したい意味もあつて、でかけていつたが、ご主人は「目を悪くして入院している。」とのことだった。わたしは、何も言い出せず、もう一度絵を拝見したまま、帰ってきた。

*注 日暮里——東京都荒川区の地名。

進駐軍——第二次世界大戦後に日本を占領した連合国の軍隊。

常磐線——日暮里を起点とする鉄道の路線。

清水達雄——一九二八年。清水建設で研究員をつとめる。

清水組——総合建設業である清水建設の旧称。

問一 〰〰〰線部A・Bの意味として最も適当なものを、それぞれア～オから選び、記号で答えなさい。

A 「たくまらずして」

B 「ためつすがめつ見た」

ア きまりにそむいて

ア いろいろな向きからよく見た

イ きまりを守って

イ 目を細めてにらむように見た

ウ 効果をあえて無視して

ウ 感動でため息をつきながら見た

エ 効果を意識しないで

エ 欲深く値踏みするように見た

オ 効果をねらつて

オ 冷たい目で客観的に見た

問二 —— 線部1「たくさんの看板」とありますが、そこには何が書かれているのですか。二十字以内で答えなさい。

問三 —— 線部2「二つ返事で『いいですとも。』といつてくれた」とありますが、このときのご主人はどのような気持ちでしたか、答えなさい。

問四 —— 線部3「ロボットはジープに乗ってもらわれていった」とありますが、この表現から、ご主人は作品に対してどのような思いを抱いていることがわかりますか、答えなさい。

問五 —— 線部4「実を言うとそれは自分にいいかせる言葉だった」とありますが、なぜこのように「いいかせる」のですか、答えなさい。

問六 —— 線部5とありますが、「五十年以上も描きつづけているのに筆づかいが器用になつていない」のに対して筆者が「いい」というのはなぜですか。問題文中の言葉を使って答えなさい。

問七 —— 線部6「小説のような話」とありますが、どのような点が「小説のよう」なのですか。具体的に一つ挙げなさい。

三 次の詩を読んで、下の問いに答えなさい。ただし、**1**～**9**は連の番号を表します。

雑草 ^や八木幹末

1 ¹
 みちばたの草をくわえながら
 なつのはの午後はながかった
 学校から家まで永遠のように遠かった
²
 ぼくはまだ学校で習うことがたくさんあった
 ひらがな カタカナ 漢字
 足し算 引き算
 それから
 お友達と仲良く遊べること
 どれもぼくには
 苦手だったけれど

2 ³
 ヤギくんは
 いつも
 ひとりで校庭の
 砂場であそんでいたわね

3 同窓会の席上で
⁴
 ネットレスをして着飾った
 ぼくの大好きだった女の子
 (いまはどこから見てもおぼさんだ)

4 道草食って
 そのままぼくは帰らない

5 スズメノテツポウ
 ヤブガラシ

6 「ネエーネエー おじさん
⁵
 この草なんて名前なの
 食べられる？」

7 食べられないよ
 とげがあるから
 気をつけて
 早く おうちに帰りなさい
 お母さんが待つてるよ

8 「母さんは五年前に死んじゃった
 今の母さん パートでいつも遅いんだ」

9 ⁶
 日盛りで揺れる雑草よ
 ぼくの大好きな少年よ
 あれは
 ママコノシリヌグイ

問一 —— 線部1「みちばたの草をくわえながら」とありますが、それはどういうことですか、答えなさい。

問二 —— 線部2「ぼく」と同じ人物を指す言葉を、詩の**3**～**9**連の中からぬき出しなさい。

問三 —— 線部3「ヤギくん」には二つの意味がこめられています。その二つの意味をそれぞれ答えなさい。

問四 —— 線部4「ぼくの大好きだった女の子」とありますが、この人物の言った言葉はどこからどこまでですか。始めと終わりの五字をそれぞれぬき出しなさい。

問五 —— 線部5「この草なんて名前なの」とありますが、「この草」は何という名前なのか、答えなさい。

問六 —— 線部6「ぼくの大好きな少年よ」とありますが、このとき「ぼく」はどんな気持ちですか、答えなさい。

◎ 解 答 に 字 数 制 限 の あ る 場 合 、 句 読 点 な だ の 記 号 も 字 数 に 数 え ま す 。

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七																																
<table border="1"> <tr> <td>A</td> <td>(じ)</td> <td>B</td> <td>(わ)</td> <td>C</td> <td>(る)</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td></td> <td>E</td> <td>(い)</td> <td>F</td> <td></td> </tr> <tr> <td>G</td> <td></td> <td>H</td> <td></td> <td>I</td> <td>(じ)</td> </tr> </table>	A	(じ)	B	(わ)	C	(る)	D		E	(い)	F		G		H		I	(じ)		<table border="1"> <tr> <td>A</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>B</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	A					B						<table border="1"> <tr> <td>X</td> <td></td> <td>Y</td> <td></td> </tr> </table>	X		Y			
A	(じ)	B	(わ)	C	(る)																																	
D		E	(い)	F																																		
G		H		I	(じ)																																	
A																																						
B																																						
X		Y																																				

二

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七				
<table border="1"> <tr> <td>A</td> <td></td> <td>B</td> <td></td> </tr> </table>	A		B							
A		B								

三

問一	問二	問三	問四	問五	問六								
			<table border="1"> <tr> <td>始め</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>終わり</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	始め				終わり					
始め													
終わり													